同友會事件陳述書[[1]](#footnote-1)

昭和十五年刑上第一〇一號乃至一〇四號

　　決定[[2]](#footnote-2)

右ノ者等ニ對スル治安維持法違反各被告事件ニ付、昭和十五年八月二十一日京城覆審法院ノ言渡シタル判決ニ對シ、被告人等ヨリ夫々上告ノ申立アリタルニヨリ、朝鮮總督府檢事米原先ノ意見ヲ聽キ、決定スルコト左ノ如シ

　　　主文

本件ニ付、事実ノ審理ヲ爲ス

　　　理由[[3]](#footnote-3)

[省略]一言以テ掩ヘバ、警察ニ於ケルモノハ殆ンド悉ク拷問誘導ニ依ル結果ニシテ、檢事局ニ於ケルモノハ檢事警察ニ臨ミ且拷問ヲ爲シタル警官ノ立會ノ下ニ、檢事局ニ於ケルモノモ亦同警察ノ立會ノ下ニ爲サレタル結果、又豫審ニ於テハ保釋ヲ慾求シタルト、何ウセ此ノ度ノコトハ處罰サルルナルベク、只執行ハ猶豫セラルルコト疑ナカルベシト輕信シタル結果ナルモノノ如シ。詳細ハ右陳述書ニ之ヲ譲リ、茲ニハ李光洙、オヨビ本辯護人ノ擔當セル被告人朱耀翰ノ各陳述書ノ一節ヲ引用スルニ止メムトス。他ハ推シテ知ルベキノミ。

李光洙ノ陳述書ニ曰ク

「警察ニ於ケル自白　　本被告人ハ昭和十二年、南總督閣下ノ内鮮一體、國體明徴ノ政策ノ聲明ニヨリ、同友會ノ精神ニ更新スベキモノアルヲ認メタリ。ソハ同友會ノ目的ニハ、唯民族改造ノコトアルノミニテ、内鮮一體、國體明徴ノコトナキヲ以テナリキ。シカモ當時本被告人ハ肺炎・肋骨ノ手術、肺炎加答兒、脊髄カリエス等ニテ、或ハ入院、或ハ蟄居、通院等ニテ□□六月ニ及ビ、六月七日遂ニ檢舉サルルニ至リシモノナリ。鍾路署ニ於ケル第一回訊問ニ於テハ本被告人ハ、皇室ト國家ニ對シテ、從來忠誠ノ足ラザリシコトヲ率直ニ懺悔シ、ソノ他ノ訊問ニ對シテハ、一ヲ問ハルレバ進ンデ二ツヲ答フル式ニスラ々々ト事實アリノ儘ヲ述ベタリ。上海ニ於ケル獨立運動、興士団、同友會ニ就キ、警察ニテハ未ダ知ラザルコトマデモ進ンデ述ベタリ。シカルニ本被告人ハ留置サレ、第二回以下ノ訊問ニ於テハ、同友會ノ目的ハ獨立ナリトノ答辯ヲ要求サル。然レド本被告人ハ、ソハ全然事實ニ反スルニヨリ否認シタリ。當時本被告人ハ發熱ト共ニ激烈ナルカリエス神經痛ヲ發シテ長座ニ堪ヘザル狀態ニアリ。

月日不明ナルモ、或日、本被告人ハ訊問官ナル齋賀警部補ノ前ニ呼ビ出サレ、「朱耀翰ハチヤント獨立ダト自白シタ。安昌浩モ自白シテヰル。」トテ、朱、安兩人ノ訊問調書ノ第一頁ダケガ見ユル様、机上置キアリタリ。「ソンナ筈ハアリマセヌ。朱耀翰モ安昌浩モソンナ嘘ヲ付ク筈ハアリマセヌ。僕ハ刑ヲ恐レルカラデナクテ嘘ヲ恐レルカラ、獨立ハ認メラレマセヌ。」ト述ベタリ。午前九時カラ午後四時頃マデ訊問サレタルモ、本被告人ハ、第一回ノ訊問ニ答ヘタルト變リタルコトナシ。入團問答ノ模様ヲ書ケト命セラレテ、書キタルモ、民族前途大業ノ基礎トハ民族永遠ノ生存繁栄ノ基礎ニシテ、ソハ民族性ノ改造ナル旨ヲ述ベタリ。

ソレヨリ約一週間後ノ或日、刑事留置場ニ到リ本被告人ヲ連出シタリ。朴刑事ハ手ニ黑色ノエナメル塗ノ薬鑵ヲ携ヘシガ、途中、湯沸カシ場ニ至ルヤ本被告人ニ水ヲ飲ムコトヲ勸メタリ。感激シテオイシク飲ム。次ニ朴刑事ハソノ薬鑵ニ一杯水ヲ汲ミ、手ニ下ゲテ、本被告人ヲ例ノ奥ノ訊問室ニ導キツツ、「ナゼ自白シナイカ。ドウセ自白セニヤ[ナ]ラヌノダ。ノツピキナラヌ證據ガ上ツテヰルシ、他ノ者モ皆自白シテヰル。」ト不愉快ナル語調ニテ告ゲタリ。本被告人ハ、ハツトシタリ。上ガルベキ證據ナドアル筈ナキモ、ソノ薬鑵ノ水ハ本被告人ノ自白ニ關係アルモノナラントノ豫感起ル。已ニ誰々ハ水ヲ飲マサレテ云々ノコトヲ聞キタレバナリ。

訊問室ニ入レバ齋賀警部補ハソノ場ニ居ラズ、セメント叩キノ上ニ見馴レザル長サ五尺クライノ腰掛アリ。朴刑事ハ、手ニ下ゲテ來タリシ水入リノ薬鑵ヲソノ腰掛ノ左端ニ載ス。板壁一重ノ右隣ノ室ニテハ或被告（韓昇寅ノ聲デハナイダロウカ、ト思イタリ）ノ「アウゴウ」トイウ悲鳴聞ユ。「云ヘ、云ヘ」トイフ怒氣ヲ帶ビタル聲聞ユ。齋賀警部補ノ聲ナラント思ヘリ。「云ヒマス云ヒマス」シバラク沈默マタ悲鳴。マタ「云ヘ、云ヘ。」アトハ何モ聞エザリキ。本被告人ハ今日ノ自分ノ運命ヲ自覺シタリ。テツキリカノ薬鑵トカノ腰掛ハ本被告人ノタメニ設ケアルコトヲ感ジタリ。他ノ被疑者ヨリ聞カサレタル道具ナレバナリ。ヤガテ齋賀警部補、不機嫌ナル顔ニテ入リ來タル。本被告人ハ立チ上リ叮嚀ニ禮シタルモ、坐レトモ云ハズ、シバラク本被告人ヲ睨ミテ後、「今マデ餘マリ可愛ガリ過ギタンダ。可愛ガツテヤツタラ、ツケ上ガツテ、本當ノコトヲ云ワヌ。嘘ツキニハ嘘ツキニ對スル方法ガアル」ト申サレタリ。「私ハマコトヲ申上ゲタノデス。國民トシテノ忠誠ガ足リナカツタトオツシヤレバ、ドンナ刑デモ甘ンジテ受ケマセウ。シカシ、及バズナガラ過去二十年間、嘘ヲツクマイ、ト心掛ケテ來タモノデス。嘘ヲツクト云ハレルノハ死ヌホドツライノデス」ト申ス。「巧妙ナコトヲ云ツテヰル。口ガ旨イ」トヒヤカサル。本被告人ハ自分ノ病メル肺ニ水ヲ吸ヒ込ムコトハ死ヲ意味スル如ク感ゼラレタリ。本被告人ハ薬鑵ト腰掛ト齋賀警部補ノ顔ヲ見ツツ、如何ニスベキカト思ヒタリ。「シカシ安昌浩モ證人トシテ訊問シタガ、獨立ダト云ツテ居ルンダ。朱耀翰モスラスラト自白シテ居ル。ソレデ朱耀翰ハサツサト釋放シテヤツタ。」齋賀警部補ハカク云ヒタリ。本被告人ハツヒニ觀念シテ、「ソレデハアナタノ要求通リニ答ヘマセウ。ソノカハリソレハ皆嘘ナノデス。」齋賀警部補ハ笑顔トナリ、本被告人ニ坐ルコトヲ許シタリ。

「デハ民族前途大業ノ基礎トイフノハ、朝鮮ノ獨立ヲ指スンダネ」「ソレハ餘リニ大ソレタ嘘ニナリマス。」齋賀警部補ハ調書ヲ書カントシタル手ヲ止メテ再ビキツトナリ、「マダソンナコトヲ云フノカ」ト怒鳴リタリ。民族前途大業ハ民族永遠ノ生存繁榮ノコトデスカラ、モシ獨立トイフコトガ民族ノ生存繁栄ニ必須ナ條件デシタラ、ソレモ結局ニ於テハ含マレルカモ知レマセヌ」ト述ブレバ、「ソレデハ答ヘニハナラヌヂヤナイカ。獨立ナラ獨立、デナイノナラナイト、ハツキリイヘ」カヤウニ長時間押問[答]ノ末、遂ニ調書ニ書キ入レタル通リノ答トナリタルナリ。「結果ニ於イテ獨立ヲモ含ム」トナリタルモノヲ思惟ス。「獨立トイウコトガモシ民族ノ生存繁栄ニ必須ナ條件デシタラ」トイウ句ヲ挿入スルコトヲ繰返シ々々々懇願シタルモ聽キ容レラレザリキ。シカシテコノ日、コノ事件ハ政治的解決ヲ見ルコトナラント何カノ場合ニホノメカサレタリ。サモアラント安心セリ。

檢事廷ノ自白　　長崎檢事ハ書記帶同、鍾路署ニ出張サレ、署内ノ一室ニ於イテ、本被告人ノ訊問ヲ開始シタリ。本被告ハ當時、病勢愈々悪化シ、警察ヨリ道衛生課ノ醫師ノ診斷ヲ受ケサセ、マタ京城醫専病院外科ニ連行サレ診斷ヲ受ケサセラレタリ。檢事ノ前ニハ長卓アリ。ソノ上ニ畳ヲ敷キソレニ横臥スルコトヲ許サレタルハ感激ニ堪ヘズ。殊ニコハ本被告人ヲ釋放入院サセンタメノ特別ナル取計ト聞カサレテ感激シタルナリ。席上ニハ署長ト覺シキ警視、井上高等主任、齋賀警部補ソノ他二人ノ刑事アリ。目的ニ就キ一應第一回ノ供述ノ如ク眞相ヲ申上ゲタルモ、「警察デ一旦認メタコトヲマタ否認スルカ。革命黨ラシクモナイヂヤナイカ」ト檢事ハ叱責サレタリ。「モト々々私ハ革命家デアリマセヌ。鍾路署デ皆サンヨツテタカツテ私ヲ革命家ニ仕立テナサイマシタ」ト申セバ、檢事始メ一同苦笑サレタリ。「シカシ全然獨立ガ含マレテイナイトハ云ヘヌヂヤナイカ」「齋賀警部補ニモ、イクラ本當ヲ申上ゲテモ取リ上ゲラレマセヌデシタ。ドウゾ好イヨウニオ書キ下サイ。警察ノ調書通リデ結構デス」ト申シタリ。内心、檢事廷デ檢事ト差向ニテ釋明スル機會モアラント思フコト、釋放入院ノ慾望ノタメナリキ。コレソモソモ根本的ノ不覺ナリキ。シカシ七月二十三日ト記憶ス、本被告ハ入院一週間ニシテ檢事局ニ連行サレ、長崎檢事ヨリ十數分訊問ヲ受ケタルモ、目的ニハ觸レズ、獨立新聞ニ書キタル文書ノ中一番ヒドイモノヲ一ツ舉ゲロト云ハレテ、「七可殺」ノコトヲ申上ゲタリ。檢事廷ニモ齋賀警部補臨席サレ、警察ニテ認メタルコトヲ否認スル申立出來ズ、イヅレマタ一二回取調アルベケレバト思ヒツツ収監サレタリ。

豫審廷ノ自白　　十日間待テドモ再ビ檢事ニ呼バルルコトナク、本被告人ハ豫審ニ廻付セラレタリ。同年十一月ノ終カ十二月始頃、渡邊豫審判事、病監ニ出張サレ本被告人ノ取調ヲ開始サル。矢張横臥ヲ許サル。體温三十七―三十八間ヲ上下ス。目的ニ就キ、獨立ニアラザルコトヲ縷々陳述シタルモ、「檢事廷デモ認メタデハナイカ」ト云ハルルノミニテ、認メテハドウカ」ト云ハルルママニ、本被告人ハ、「私ハマコトヲ申上ゲタノデス。警察デモ申シ上ゲマシタ。檢事ニモ申上ゲマシタ。シカシマコトハ通ラズ、嘘ダト宣言シテ申上ゲタコトガ通ルノデス。アナタニモ申上ゲマシタ。私ハ公判廷デモ必ラズマコトヲ申上ゲルツモリデス。ソレデモ通ラナカツタラ運命トアキラメマス」ト申述ベタリ。ソノ記録ガ如何ニナリ居ルヤ知ラズ盲判ヲ押シタリ。已ニ目的ガ僞ナレバ他ハ見ル要ナシト自暴ヲ起シタルナリキ。豫審判事ガ病監ニ出張サレ臨床訊問スルハ保釋ノタメナラント思ヒタリ。

昭和十三年四月、本被告人ハ醫專病院ニ於イテ、代ハラレタル小林豫審判事ノ取調ヲ受ケタリ。當日晝間體温三十七度八。衰弱甚ダシ。保釋入院シテ四個月目ナリ。小林豫審判事ニモ目的ノ審議ガ民族改造ニアリテ獨立ニアラザルヲ陳述シタリ。「檢事廷デハ獨立ダト認メテイルゼ。渡邊豫審判事ニ認メテイルデハナイカ」ト云ハレタリ。本被告人ハ警察ニテ、「モシ獨立ガ民族永遠ノ生存繁栄ニ必須ナル條件デアルナラ」トイフ、條件付ニテ認メタルガ、ソノ條件ノ句ハ調書ニ入ラズ、檢事廷ニ於イテモ、渡邊判事ニモソノ事ヲ申上ゲタルモ取上ゲラレザリシ旨ヲ述べ、「同友會ノ目的ハ民族ノ永遠ナル生存繁栄ノ基礎ノ準備、卽チ民族性ノ改造デアツテ、政治的獨立デハアリマセヌ。コレガ本當デス」ト申シ上レバ、小林判事ハ手ニセル鉛筆ヲ卓上ニ投ゲテ、「ソレデハ豫審ヲヤリ直サニヤナラヌ」ト云ハレタリ。コノ一言ハ實ニ怖ロシキ一言ナリキ。客年八月豫審ニ廻ハサレ已ニ八ケ月、ヤツト皆豫審終結モ近ヅキ保釋ニナルモノト、ソレヲノミ唯一ノ樂トシ居ル筈ノ四十餘名ノ被告ニ取リ、豫審ヲ遣リ直スコトハ堪ヘラレヌ苦痛ト思ヒタリ。

カクテ本被告人ハ懊悩シツツアル時、小林檢事ハ、「コンナカラツポノ事件見タコトガナイ。アタリマヘナラ解散位デ濟ムノダガ、時勢ガ悪インダネ。ドウセ同友會ハ何モシテ居ナインダ。獨立運動ナンカ一モシテ居ナイジヤナイカ。唯、會員達ガ主觀的ニ獨立ヲ希望シテイタトイフコトダケダ」ト云ハレタリ。本被告人ハ小林判事ノコノ言ニ深キ意味アルモノト思ヒタリ。卽チ、コレハ大シタ罪ニナラナインダナト思ヒタルナリ。小林判事ハ續ケテ、「檢事廷デ言ツタ通リ認メテハドウカネ」ト云ハレタリ。本被告人ノ所見ニテハ長崎檢事モ、渡邊判事モ、コトニ小林判事モ、非常ニ頼モシク同情アル人格者ナリキ。ワガ眞心ヲ述ベタル以上、記録ニ止メルコトハ、法的技術ノ必要ナラント信頼ノ心持ニテ、「警察ノ調書通リデ結構デス。」ト申上ゲタルモノナリ。カカル愚カナル心理ナドニヨリ、小林判事ニモ同様ノコトヲ申上ゲテツヒニ豫審ノ決定ヲ見タリ。

相被告等ノ家族ノ者、被告人ノ病室ヲ訪ネ、保釋ニナラザルコトヲ嘆ク度ニ、本被告人ハ、早速面会シテ、同友會ノ目的ノ中ニハ獨立モ含マレテイルト供述スルヤウニ勸メナサイ」ト申シタリシニ、必ラズ効アリキ。被告崔允鎬ノ如キハ豫審終結前日マデ、保釋ニナラズ、ソノ妻本被告人ノ病室ニ來リ泣キ嘆クヲ以ツテ、卽日面會スルコトヲ勸メタリシニ、崔允鎬モ保釋トナリタリ。要スルニ被告ノ警察ニ於ケル第一回ノ調書ト、公判廷ニ於ケル供述ガ事ノ眞相ナリ。檢事廷及ビ豫審廷ニ於イテモ被告ハ一應眞相ヲ申述ベタルモ、ソハ記録ニ乗ラザリシナリ。同ジ人ノ自白モ記録ニ乗リタルモノノミ有効ニシテ、記録ニ載スルト載セザルトハ、訊問官ノ自由ナリ。若被告人ノ供述ヲ録音シタランニハ、スベテ一致ノ供述ナルヲ證セラルベシト信ズ」

[中略]

仍テ記録ニ就キ峻厳ナル檢討ヲ盡クルニ、原判決ニハ重大ナル事實ノ誤認アルコトヲ疑フベキ顕著ナル事由アルモノト認ムルヲ以テ、本院ニ於テ事實ノ審理ヲ開始スベキモノトシ、爾餘ノ上告論旨ニ對スル説明ヲ省略シ、刑事訴訟法第四百四十三條ニ則リ主文ノ如ク決定ス

昭和十六年七月二十一日

高等法院刑事部

　　　裁判長　朝鮮總督府判事　　　　　　原正鼎

　　　　　　　朝鮮總督府判事　　　　　　高橋隆二

　　　　　　　　　　朝鮮總督府判事　　　　　　藤本□藤

　　　　　　　　　　朝鮮總督府判事　　　　　　舟田誠一郎

　　　　　　　　　　朝鮮總督府判事　　　　　　池田□之助

　　　右謄本也

　　　　　　　同日於同廰

　　　　　　　　　　朝鮮總督府裁判所書記　　　茨木小三郎

1. 1940年8月21日、同友会事件の二審で全員有罪判決が言い渡され、被告全員が上告をした。本資料は1941年7月21日、高等法院が一審と二審の記録に問題が多かったことを理由として事実審理を行うことを決定したもので、このなかに李光洙の陳述書の一部が引用されている。読解の便宜のために濁点と句読点を適宜挿入し段落もつける。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 李光洙以下全被告の現住所、本籍、創氏名、本名、年齢が記載されているが省略。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 以下130頁にわたって事実審理を行う理由が述べられ、その中に李光洙と朱耀翰の陳述書の一部が引用されている。李光洙の陳述書の引用部分をその直前から提示する。 [↑](#footnote-ref-3)